

## 有職装束の調査と授業教材作成

## Investigation of Ancient Court and Making of Teaching Materials

阿部 栄子<sup>1</sup>, 加藤 加苗<sup>2</sup>Eiko abe<sup>1</sup> and Kanae kato<sup>2</sup><sup>1</sup>大妻女子大学家政学部, <sup>2</sup>東京都立八丈高等学校

キーワード：装束, 唐衣裳, 教材

Key words : Ancient court, Karaginu-mo, Teaching materials

## 1. 研究目的

装束は、千二百年もの長きにわたって日本の伝統を受け継いでいる特徴的ファッション文化である。大嘗祭を初めとして一部に受け継がれている伝統衣裳、特に装束類（束帯・唐衣裳）には現在の和服製作の原点を改めて考えさせられる貴重な要素が多々ある。本研究は、これらの装束類のうち、男子束帯の下衣である表袴・大口袴，女子装束の下衣である長袴（打袴）の「襠」を取り上げ、これら装束の袴3点に共通する襠布の形状，およびその構成に注目して考察した。続いて，現在一般に製作・着用されている襠有り袴（男袴）との違いを検討した。

## 2. 研究実施内容

## 1) 現在，製作・着用されている「馬乗り袴」

襠布は、布幅の不足する部分に補う布として、羽織・袴・袋物などでも多用されている。また、馬乗り袴などのようなズボン形式の袴では、一般には図1および図2に示す通り、1~2枚の平面的なタテ布使いの襠布が着用者の寸法に合わせて布幅を補い、脚部の動きを容易なものとしている。

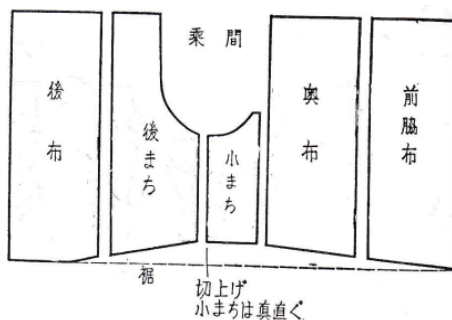


図1. 馬乗り袴の裁断図（男袴）

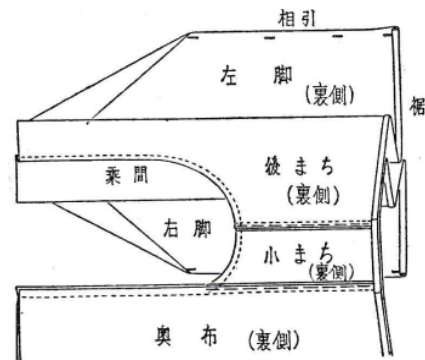


図2. 馬乗り袴の襠布（男袴）

## 2) 束帯の大口袴・表袴に見られる「襠布」

大口袴は、表袴の下袴として着用される。図3には、表袴の下に大口袴を内側に入れ、着用時の様子を示したものである。表袴の両裾に大口袴の裾部分に3~4cm長く、外に出ていることが確認できる。



図3. 表袴・大口袴

①口袴の襦布

図4には、大口袴の前面を示し、図5は大口袴の襦布を示している。襦布は、布幅を二つ折りして、バイアス使いにする。このことにより、襦布は小さい襦布でありながら、伸縮性に富みと同時に丈夫であり、足の動きに追従した実に効果的なものとなる。

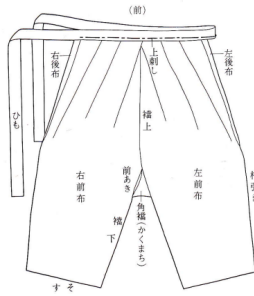


図4. 大口袴

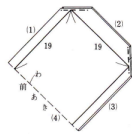


図5. 大口袴の襦布

②袴に見られる「襦布」

図6には、表袴の前面を示す。先の①項で述べた大口袴の襦布とは、大きくその形状を異にすることがわかる。図6に示すように2枚の長方形襦布が、前紐から後紐に縫い留められているだけの襦付けである。さらに、この様子を図7に図解してわかりやすく示した。

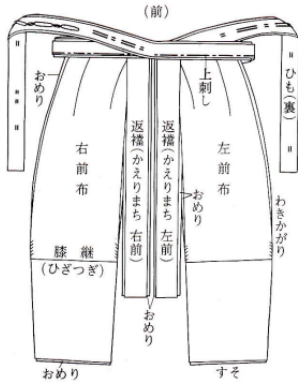


図6. 表袴

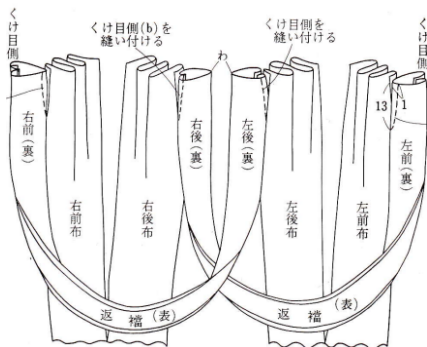


図7. 表袴の襦布 (左右に2枚)

3) 唐衣裳の長袴の襦布

図8には、長袴全体の形、および各足布の図解を示した。これらの図から襦布の形態が、これまで述べてきた束帯の表袴・大口袴の場合とは大きく異なることが容易に確認できる。

さらに、この長袴の襦では左右の脚布を腰布に縫い合わせる際には、図8に示す(a)~(b)の二つの部分を(c)点に続けて縫い合わせる(三つ縫いすることにより、完成する。

図9には、長袴の左右脚足布を縫い合わせた布の様子を示している。本図の左図は、各布の縫い合わされた状態を示し、右図は展開図を(脇あき~相引きを広げた)示している。これらの図から、図中の「A点」が起点となり、左右の長くて大きい脚布が振じれた状態で長袴が完成されることがわかる。つまり、長大な布を直線的に縫い合わせるにより、立体的縫製により長袴が完成されていることを表している。

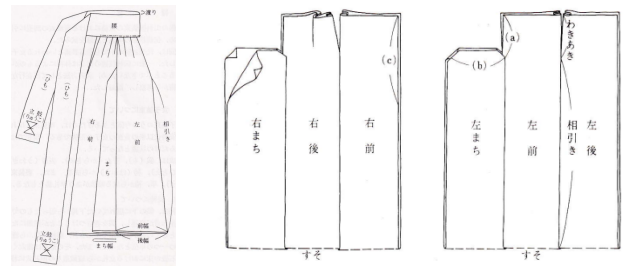


図8. 長袴 (左) および各布の展開図 (右)

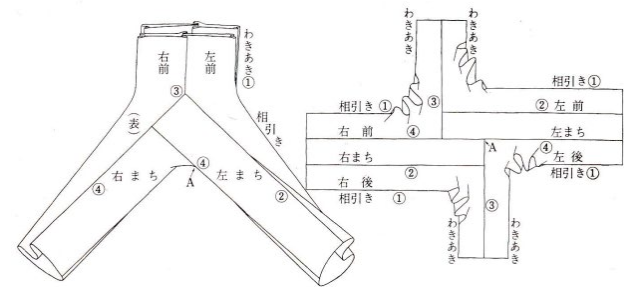


図9. 長袴における「襦布」の縫い合わせ (図中のA点が振じれて完成する)

3. まとめと今後の課題

本研究は、和服の縫製技術・伝統技術を客観的に解明し、後世に伝えるとともに、本学の教育研究に役立て、今後の家庭科教育、被服構成学分野に貢献したいことから始まった。本報では、千二百年もの長きにわたり日本の伝統を受け継いでい

る装束に焦点を当てた。特に、嵩高な衣裳の構成特有の縫製方法として「立体縫製」を見出すことができたことは意義高いと判断できる。

今後は、それぞれの袴を人間が着用した際の脚部を中心とした動きについて実証することができれば、更に有益な被服学分野の有用な教材として活用できると考えている。

### 謝辞

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K2103）を受けたものである。ここに心より、感謝申し上げます。

### 参考文献

- 1)大妻コタカ.和裁講座後編.日本女子教育会.1979
- 2)八束清貫.装束の知識と着法.文信社.1962
- 3)栗原弘.河村まち子.時代衣裳の縫い方.源流社.2006